

星の停留所 (20) ヘルクス星

土山 紀子

今回は、名実アスクレピオス（へびつかい星）や賢人ケイロン（いて星）と並ぶ夏の夜空の名星、勇将ヘルクス（ヘルクス星）をご紹介します。星名の“ヘルクス”はヘルクスの名をラテン語綴りにしたもので、以下、星名はヘルクス星、神話の叫の英雄の名はヘルクスと表記してお話しします。

天の川の畔に位置するヘルクス星は、プトレマイオス48星星の一つ。3等星以下の星ばかりの大きな星星で探しにくい印象ですが、胴体を作るH字型が特徴です。南天時はほぼ天頂に昇り、地頂に頭を向けて蹲いた形で星星になっています。この星星が英雄ヘルクスと関連づけられたのは比較的后になってからで、その時代は単に“ひざまずく星”あるいは“鋭い星をした星”“棍棒を持つ星”と呼ばれており、アラートスも『ファイノメナ』で「このひざまずく星は一体誰なのか」とうたっています。

このためヘルクス星は神話上の様々な人物と結びつけられてきましたが、それは紀元前3000～3500年頃のカルデア神話、太陽神イジドゥバルの星除物語が知られます。イジドゥバルの物語は太陽の通り道である黄道12星星について語っていると考えられ、時を経て、ギリシア神話の“ヘルクスの12功業”の物語へと変化をとげます。ヘルクスの12功業はしばしば黄道12星星と結びつけられますが、これはもともと太陽神の星除物語だったからなのです。

ヘルクスは、ペルセウスとアンドロメダの孫アルクメーネーとゼウスの間に生まれ、神と人間の血を受け継いでいましたが、ゼウスの妻ヘラの憎しみのため赤ん坊の頃から試練を受けます。ヘラは、彼の人生を邪魔するために様々なことをしましたが、ヘルクスの名は“ヘラ女神の栄光”という意味で、やがて天にあがったとき、ヘルクスはヘラの許しを得て永遠の幸福を得たと言われます。

ヘルクスの12功業は、順番が前後することもあります。次の仕事を掲げています。関連星星は物語の概要から分かりにくいものもありますが、またの機会にご紹介しましょう。

- ★ネメヤの森のライオン退治。（しし星）
- ★レルナの9つ頭のヒドラ退治。（うみへび星・かに星）
- ★エリュマンタス山のイノシシ捕獲。ケンタウルス族と戦いとなり、ケイロンが勇将故死。（ケンタウルス星・かに星）
- ★アルテミスの聖獣 金の枝角を持つ蛇の生け捕り。（さそり星・カシオペア星）
- ★ステュンフォロスの湖に住む、青銅のかぎ「とくちばしで人を食べる鳥の大群退治」。（いて星・わし星・はくちよう星・ペガ：こと星・や星）
- ★エリスのアウゲアス王の家畜小屋の掃除。（やぎ星・エリダヌス星・みずがめ星）
- ★ポセイドンがクレタ島へ送った牛の生け捕り。（みずがめ星・おうし星）
- ★トラキア王ディオメデスの人食い鳥の生け捕り。（うお星・ペガス星）
- ★アマゾン女王ヒポライトの帯の褻り受け。（おひつじ星・アンドロメダ星・ペガス星・くじら星）
- ★人間と山羊と羊の3つの頭を持つ怪物ゲリュオンが飼う牛の生け捕り。（おうし星・オリオン星・おおいぬ星・こいぬ星・ぎよしゃ星・コップ星・さそり星）
- ★地獄の番犬ケルベロスの生け捕り。（ふたご星・おおいぬ星）
- ★ヘスペリデスの獣の黄金のリングを奪う。（かに星・りゅう星・おおぐま星・うしかい星）

ヘルクレス座は、英雄ヘラクレスのほか、隣のおおぐま座と隣接づけてカリストの変身悲しむ父親リュカオン又は乳のカエテウスとする説、学童に従軍する姿から馬車で動くラピタイの王イクシオンと見る説、コーカサスの崖に鎖でつながれているプロメテウスと見る説などが知られています。キリスト教では、蛇と林檎と共に語られるアダム（創世記）、素手でライオンを引き裂いた怪物の英雄サムソン（士師記）に例えられました。

この座のα星は、美しい二重星であり、2.7等～4.0等の範囲で下規則に変光するラス・アルゲティ（Ras Algethi）。“ひざまずく者の頭”を意味するアラビア語が語源です。アラビアの遊牧民にはアル・カルブ・アル・ライ（羊飼いの犬）とも呼ばれましたが、これは現在へびつかい座βの生育子として知られています。へびつかい座の項でお話したように、アラビアの古い星座でヘルクレス座αとへびつかい座βは天の牧場を守る番犬とされていたのです。中国では“皇帝の椅子”と呼ばれていました。

2.8等のβ星はコルネフォロス（Kornephoros）。“棍棒を持つもの”という意味のギリシア語をローマ字化した名前、星座全体を表す名前がβ星の生育子となったものです。“黄金の赤”という解釈もありますが、適切ではないようです。稀にルティリクスという名を先かけ、ローマ時代の剣rutrumが語源とも考えられますが、詳細はわかりません。中国ではβ星を“川の叫”，これに対しγ星（3.8等）を“川の閘”と呼んでいました。

κ(5.0等)のマルファク：Marfak：ひじ，λ(4.4等)のマシム：Masym：手首，ω(4.6等)のクヤム：Cujam：棍棒は、それぞれ星座の位置を示すアラビア語が語源です。

κ星マルファクは、マルフィック(Marfic)，ミルファク(Mirfak)とも書かれ、fをsと間違ったMarsicという名も知られます。κをχと見間違い、χにこの名を与える文献もあります。へびつかい座をマルフィックといいます。同語源の星名です。κは、中国では近くの星と共に“祖先の星”でした。マシムは、すくはoの名でしたがバイエルの星図で入の名とされています。

3.1等のδ星をサリン（Sarin）と記す文献がありますが、意味は不明で定義した生育子ではなさそうです。

